

ルとしてきた欧米のモデルに追隨するのでは二十世紀の日本人に課された重い課題を解決することはできない。

ではどうすればよいのかは、容易に答えの出る問題ではないが、それに近づく一つの方法は文明史的な探究が示唆してくれるように思う。第一には現代の文明を開いてきた主体である西歐文明の本質を理解し、選択的に摂取を続けること。第二に中国、インドなど東洋思想の中から現代に活かしようる理念、平和維持についていうならば善隣友好、平和五原則、経済社会については循環型社会に向けて「足るを知る」知足の原理を現実的に考えてみる。第三に二十一世紀の最も困難な問題と考えられる宗教的文明圏の対立の危険については、そのような危険性の高い地域において、諸民族の共生による広域的な経済協力を国際的に進めさせる。また、そうした努力と平行して現在すでにキリスト世界で萌芽的に始まっているエキシメニカル(諸宗教の相互理解と一致)の運動をイスラム教やユダヤ教にも拡大することを試みる、などが挙げられよう。

さいわいに、日本は東西世界の文明を二つながら摂取し、独自の文化を築いてきたことに、世界の多くの文明史家が、日本文明の独自性を認識し、高く評価するようになった。このことは、世界文明の今後の展開において、日本の担うべき役割を示唆している。

その場合に、日本の立場は、古代の中国文明以来、多大の恩恵をこうむってきた先進的な文明に対して謙虚な姿勢を取ることはもとよりであるが、同時にその持てる経

済、技術上の力を尽くして、いまだ文明の恵みに浴しえないでいる開発途上諸国の人びとのために役立たせなければならぬ。

これらのことが十分に行われたとき、私たちは漱石が「上滑り内発的でない」と述べた日本の文明への批評を返上できるのではなからうか。(元日本大学教授、国際関係学博士)

岡田恒輔と山口政二

「一高魂物語」の奇縁

川中四〇回 高篠平太郎

付記II母校の同窓会員も多数会員として加わっていた

「川越ベンクラブ」の季刊誌「武蔵野ペン」に「文明論ノート」というエッセイを連載中です。御関心のある方は筆者まで御連絡下さい。(〒492-0211 四九二二二二〇九)

岡田恒輔(敬称略、以下同じ)は川中第一回、また、山口政二は第三回の卒業生である。岡田は、先の百周年記念誌「くすの木」の「はつかり人物誌」の劈頭を、小山誠三代(現飯能市長)の健筆によりいみじくも記述されている通りであるが、山口については記述するところが少ない。歴史ある本校の卒業生が、各方面に多士齋々であることは申すまでもないが、私の川中やその後の時代を顧みるときに、特に、右の二人の先輩に尊敬と私淑と、そして親近さとを覚えつつ



一高生徒主事時代の岡田恒輔(自大正14年10月至昭和7年5月、後方は事務主任依元友道)

今日に及んだ次第で、駄筆を顧みず貴重な紙上を煩わすことを切にお赦しただきたいと思う。

確か、昭和十四(一九二九)年の夏休みを前にして、私は、古い寄宿舎跡の二階にあった当時の図書室、「明治文庫」で一冊のペーじユ色の書物に出遭った。漢岩豊平著、「一高魂物語」(非売品)である。見開いて「目次」はなく(巻末についていた)直ちに、「愛する未知の小さき友達よ。懐しい物語を諸君の胸に贈るときが来たのを嬉しく思ふ。諸君は必ずやこの物語を、悲しく勇ましく聴き惚れるに違ひない。」に始まる「序曲」、何ともいえない美調に魅せられた。しかも、裏表紙には「岡田恒輔氏寄贈」の刻印もあったから、早速、借出した。因に、岡田は入間郡吾野村(現飯能市)の出身であるが、少年期に入間郡大塚村多利和(現坂戸市)の叔母宅に寄留して大塚村小学校に学び、そこで高萩村からの私の亡父と同級生となったという

次第で、事実、小学校長を辞した父は晩年までこの竹馬の友を「岡田、岡田」と呼び、教育を通じて文通を交わし、かつ誇りにしていた。その岡田氏寄贈の「一高魂物語」であつてみれば、借出し一層胸にときめくものがあつた。暑い夏休みの間、折さえあれば読んだこの物語は、明治・大正期の向陵(二高)健児の美談、奇談はては破邪顯正の武勇談など実に面白かつたが、中でも、徳富蘆花の奉天・沙河日露の戦いに勝利した児玉將軍の「勝の哀しみ」満堂寂として聲なし」や、恨みは長し「巖頭の感」の「藤村操の死」、「別れを惜しむ向陵一下の健児」の「恩師新渡戸校長留任運動」など何度読んだことか。そのころ、次第に軍事色を強めてゆく川中の教育方針に抵抗を感じていた私は、当時の模範生ではなかつたし、むしろ、同盟休校も起きたといわれた大谷前校長時代に漠然とした関心を持ったのも、これらの物語を耽読して「自由」に目覚め、且憧れたからであつたらうか。

しかし、この物語の中で、私が別して興味を覚えたのは、「独眼將軍の徒歩旅行」の一章であつた。まず、「向陵名物、山口独眼將軍」で始まるこの部分の叙述を借りて



一高生徒監時代の山口政二(自大正14年6月至同10月)

みよう。「其の頃、一高の名物男が一人あつた。彼はひとり一高に於いてのみならず、遠く早稲田、慶応にも鳴り響いてゐた快男児であつた。当時の新聞や雑誌によつて彼の驍名は紹介されていたため、口中の学生界に彼は知られてゐた。読者のうち或は当時の冒険世界や武快世界を読まれた方は、彼の名を記憶してゐられるであらう。一高の山口独眼と云つたら、『おー彼か。』と云われるに違ひない。山口独眼といへば、その頃早稲田の名物、吉岡彌次と、副対にせられていた。片方が紅旗の下に、『フレ一・フレ一早稲田』のエアールを指揮すれば、他方は白旗の下に、『勝つたがえー、勝つたがえー、勝つたがえー』の怒号を指揮したものであつた。そして、文面は更につづいて、『彼は埼玉の産であつた。関東の野武士の心は、彼の風貌にも其の儘現われていた。朴訥粗行、剛健單純の資性は、彼の面構へを見るものの第一印象であつた。彼は加えるに独眼(左眼失明)であつた。隻眼炯々として人を射るの状は、如何見ても物凄かつた」とある。「埼玉の産」とは一体どこか? は、ときの私にとつて、実に素朴な第一の疑問であつたから、思い切つて父に聴いて見た。父は、意外にも山口独眼を知っている、というのだ。「比企郡川島鎮の出身で、昭和初期の代議士で有望視されたが亡くなった。生きていれば文部大臣になつたらう。比企松山が地盤であつた。」などという。山口独眼こと山口政二がわが川中の大先輩であることを知るのは、遙か後日のことであり、当時の私は同窓会名簿の存在すら知らなかつたのである。